

# フィールドワーク 心得帖

## フィールドでの作業

定型的なデータを元に分析する研究者として、フィールド作業を三つに大別している。母集団上の分布の推定、問題に関する理論的考察、調査作業の段取り決めである。限られた滞在期間内にこの三つを満足できたことは未だかつてない。

### ●母集団の概観

母集団上での分布の推定といっても、問題の全体を俯瞰しようとするのではない。問題の全体像を知るために、対象のどこからどの程度重点的に情報収集すべきか、つまり、母集団中に異なるグループがどれだけ存在し、それぞれからどれほど標本を採るべきか、大雑把に把握することである。

例えば、灌漑評価には水の供給量と排水量が重要な視点となる。もしも、水量に問題のない地域ばかりから情報収集すると、全体像の把握ができないばかりか、問題がないと誤って判断しかねない。このため、干ばつや湛水被害が発生している場所を把握し、問題地区からも確実に標本を採る必要がある。単純な無作為標本を採る方法もあるが、問題地区の標本数が偶然

少なくなる危険がある。全体を問題地区と通常地区に区域分け(層化strata)し、問題地区から確実に情報を得るように、各地区で一定数の標本を得ると、要領よく安価に情報が収集できる。

この作業には、研究対象の全数リストを入手し、それぞれが問題地区にあるのか通常地区なのか調べる必要がある。これは全戸調査(センサス)なので時間と費用がかかる。よって、既存資料は可能な限り利用する。農村では許可を得て住民台帳や選挙民台帳を用いたり、灌漑調査では水利組合員名簿や農協組合員名簿を活用した。何もなければ自作するしかない。住民組織が脆弱で公共部門も存在感のない南アフリカのタウンシップでは、調査員が全戸を列挙する必要があった。しかも、タウンシップには番地すらあてがわれ

ていない地域があるので、番号を振り、GPSで場所を記録するなど必要であった。

### ●理論的考察

二つ目の作業は、問題に関する理論的考察である。問題がどのような広がりを見せているのかを把握できたとしても、その原因を突き止め、論理だつて解法を示さなければ、研究として価値が低い。原因を突き止めるためには「データによる仮説検定が必要になるので、検定に要する情報を特定せねばならない。予算には限りがあり、収集する情報の量と質は反比例するため、仮説検定に不要な情報は可能な限り削ることが望ましい。よって、フィールドにいる短い間に候補となる仮説を少数に絞り込む必要がある。

仮説を絞るためには、関係者と対話を重ねることが第一義的に重要である。違う人に繰り返し同じ質問をすることにより、標本は少数で擬似的ながらも、仮説検定の感触や推計結果解釈のヒントが得られるからである。回答が異なれば、回答者の境遇が他者とうとう違うか尋ね、仮説を修正したり、収集すべきデータをメモにとる。

この際に、回答者の言葉を字義通りに取ってはいけない場合もある。例えば、タイの小都市近郊農村で、消費地に近く水が豊富にありながらなぜ野菜栽培をしないのかと尋ねて、「野菜は大変だ、疲れる。米はいい、時けば苦労なく収穫できる。」という回答を得ても、決して「怠け者か?」などと思つてはいけない。稲作好みという文化や農家の選好で説明できないとは言わないが、これらは全ての原因を説明でき、反証もできないので、科学的思考からすれば禁じ手である。まずは自分の分析枠組みである経済学の論理を以て説明を試みなければいけない。この例では、近郊農村では賃金が高いこと、さらに、タイでは米作補助金があることを想起し、費用面では労働集約的な野菜よりも労働粗放的な稲作、収入面でも補助のない野菜よりも補助のある稲作の方が経済合理的だ、という意味だろうという解釈になる。もちろん、解釈が正しい保証はないので、研究関心に合致していれば、検証するための分析枠組みを考え、それに適したデータを収集することになる。

フィールドから宿泊地に戻れ

ば、仮説の再検討と既存文献との整合性検討が欠かせない。既存文献に仮説の妥当性に関する答えが示されていれば、重複なので興味の重点を移すべきである。既存文献と異なる知見が期待できるのであれば、なぜ異なるのか考え、相違点が強調できるように研究デザインを修正すると、自分の研究の特徴が際立つ。このため、フィールドにおいても既存研究に立ち戻る余裕と同僚研究者と議論する場が研究の独自性を確立する上で重要になる。インターネットに接続すれば既存研究を閲覧できるようになったことは、この点でも助けとなっている。

### ●調査の段取り

三つめの作業は、調査の段取りを付けることである。データ収集をする上では、定型化された質問票を使い、調査委託先を決め、調査員を雇用し、データを入力して日本に送ってもらう。このため、質問票を書き、作業プロトコルと怠業防止などの仕組みを考え、調査員を訓練し、データ入力プログラムを完成させねばならない。

質問票を確定するにはプリントアウトを繰り返すことになる。こ

の間、回答者が意図を理解できないような質問にすること、典型的な回答をコード化して誤記入を減らしつつ調査時間を節約することに加え、回答が同じになる質問はするだけ無駄なので、回答内容が散らばるようにすること、などを目標に質問内容を修正していく。

このようにして質問票が確定すると、調査員を訓練し、データ入力プログラムを書くことになる。質問票が誤解されて誤った情報を得てもどうしようもないので、調査員と監督者が質問票に慣れるまでの期間は十二分に取らねばならない。雇用する調査員は定型的な質問票に不慣れなので、慣らし期間が必要である。さらに、調査監督者が質問票の誤記入などを探知可能になるように、現場で指導する必要もある。

訓練と並行して作成するデータ入力プログラムの出来がよいと、誤入力や矛盾する回答などを探知でき、データ提出後のデータクリーニング量を削ることができる。データクリーニングは日本にいる研究者と現地の調査委託先がeメールや電話を通じて連絡を取り合うので、意思疎通に手間暇がかかる。よって、

調査員をよく訓練して間違いを減らすこと、出来のよいデータ入力プログラムを書くことが、後の作業量を減らす鍵となる。

調査をいよいよ開始するにあたり、外部者に対する警戒心が強かったり、地元のボスがいる地域で調査をすると、税金徴収の手段なのでは、などのあらゆる疑念を招きかねない(そもそも所得税を納めていないのに、いや、納めていないからかもしれないが)。このため、調査開始前に、必要に応じて地元の実力者に非公式な許可を得ることがある。日本人の研究者は何をどうしてよいのか分からないため、地域の事情に通じているNGOなどに許可を得るよう協力を求め、われわれは趣旨説明とご挨拶をする程度である。稀に、許可を得るまで調査はおろか訓練までも停止を余儀なくされることもあるが、穏便に調査をする上で避けて通れないので、遅れを甘受せねばならない。実際の効果は定かではないが、非公式な許可を得ると回答拒否率が下がると述べる調査員もいるので、調査にとっても役立つている可能性もある。

さらに、自分が日本に帰国した後のスケジュール、および、

研究所が要求する多くの契約書類や事務処理に驚くほどの時間がかかることまで説明して合意するのも欠かせない。

これらはすべて必要な作業であるが、滞在期間は限られているので、優先順位を付けながら実施しなくてはならない。時間が足りなくても必ず終わらさなければならぬのが、標本の決定、プリントアウトと質問票確定、契約に関する説明と合意である。そのしわ寄せで削られがちなのが、本来ならば最も大切な理論的考察や調査員訓練の時間である。データ入力プログラムに至っては帰国後に完成させることがほとんどである。訓練やデータ入力プログラム作成などは、本来ならば研究者が関わるのは非効率なので外注すべきである。しかし、研究所に適切な準備がないために、プログラム外注準備に気の遠くなるほどの時間がかかったり、訓練用の日本人補助研究員を雇用できなかったりする。このため、せっかくの現地調査が調査の段取りに費やされ、肝心の研究課題の研究が疎かになってしまう。研究所における研究管理業務増加の波は、遠くインドの山奥にまで押し寄せているのである。